

千葉の七夕空襲

鳥飼 道明(とりがいみちあき)

昭和7年4月7日生

千葉県立千葉工業学校

機械科1年生(13歳)

あれから70年、昭和20年7月7日の千葉空襲は七夕空襲と云うと、落語家の林家三平師匠の奥様がテレビで話しておりました。

この方も静岡県沼津市に縁故疎開中、3月10日の東京大空襲で家族6人を失い、直ぐ上の三男だけが生き残り、戦災孤児になられたそうです。

千葉市の空襲は昭和20年6月10日新町・新田町・新宿町周辺が爆撃された(主に爆弾)以来、頻りに空襲警報が発令されたので、夜になっても普段着のまま寝ていた。

当時の千葉は軍隊と病院の町と言われたくらい軍関係の施設が多くありました。椿森には鉄道聯隊、聯隊司令部の経理科、作草部には気球聯隊、兵器補給所、轟、穴川には歩兵学校。鉄道聯隊、戦車学校、稲毛方面には、高射砲学校。蘇我には日立航空機など軍関係の施設が沢山ありました。

B29から、最初に照明弾が投下されナイターのグラウンドのように明るくなって、焼夷弾が風を切るようなサー・サー・サー・サーという音、そして束ねてある焼夷弾が空中でバラバラになって、ぶつかり合う音だろうか、カラ・カラ・カラという音。あの日は、祖父は千葉大学で当直、父親は歩兵学校で不在、祖母と姉は、空襲が始まると直ぐ、指定の避難先である千葉寺に行きましたが、既に爆撃を受け炎上中だったとの事。

最初は千葉市の外郭から爆撃、包囲し退路を絶ってから中心に向かって爆弾、焼夷弾を投下したようでした。その前日、母親は弟2人を連れて田舎の実家に疎開。危うく難を逃れた。

私達(姉、叔父、私)は、大きな茶箱に入った米と大豆を防空壕に埋め、ミシンの頭部を池に入れた後、指示に従って寒川方面に避難、途中柏戸病院裏の住宅は燃えていた。寒川小学校を過ぎ其の先の寒川の船溜りでも何人かの人々が亡くなっていました。



(千葉駅・県庁周辺)

1945年6月10日 爆弾

1945年7月7日 爆弾・焼夷弾



は爆弾



は焼夷弾

なおも南の方の砂浜に誘導され、其処には埋め立てに使うような大きな鉄管があったので、其の中に入ろうとしましたが、もっと南の方に行くように指示され、更に先に行くと、多くの人が集って来た。白い服を着ている人が多く、危険なので私達は更に南の水際へ移動した。今振り返るとだんだん危険な方に導かれたようだ。この先に日立航空機の工場があることは頭に無く、ただ焼夷弾を恐れて軍需工場の近くに避難したのが不運でした。海岸の水際で乾いた海草を集め腰を降ろした。

〈姉が背中に2発と私は^{てんぶ}臀部に1発爆弾の破片が突き刺さり負傷〉

左を見ると水飛沫を上げながら爆弾が落ちてくるのを目撃、咄嗟に親指で両耳を押さえ、残りの指で両目を押さえ口は軽く開けて伏せようと（爆風で

眼球が飛び出す場合があると訓練を受けていた)立ち上がった瞬間に隣の姉が、ヤラレタと叫んだ私もお尻の^{あた}辺りをバットで叩かれたような衝撃を感じたので手を当てると小指がズボット入ってしまった。もし腰を下ろしたままの状態でしたら即死したと思う。いろいろの物が散乱し、多くの人が泣き叫びこれが修羅場というのだろうか。更にもとに戻り、雨が降って来たので最初に足を止めた鉄管の中で救助を待った。覗いて見るとこの鉄管の中でも命を落とした人々がいた。

それから出血の為、意識が無くなったようだ。気がついたら日立航空機の格納庫らしい大きな建物の中に収容されていた。私の左隣は小学生位の女の子、其の先隣は全部死体、中には首に被弾したのか、胴体と頭部が分離したらしい頭を遺体の傍に添えてあるのを見た。女の子は、かなり苦しんで居て水が飲みたいと言い、医師が水を飲ませたらやがて息を引きとった。

私の左隣から先は全部死体、右隣りが姉、其の隣が学校の先輩等、多くの負傷者が横たわっていた。姉は背中に被弾するも、幸いにも布団を被っていたので打撲傷で済んだ。もし母親、弟達が疎開してなかったら、もっと被害が多くなったかも知れない。大学病院は負傷者で溢れているとの事で、私と姉は現在の教育会館が救護所になったので其処に収容された。最初の収容所(日立航空機の格納庫?)から教育会館までの移動は全く記憶が無かった。教育会館に着いたときは、負傷者で溢れ、火傷を負った人が多く野戦病院のようでした。姉は背中に10センチぐらいの^{あざ}痣が2か所出来たが、このぐらいの負傷は軽症で即日退院となった。

私は深さ13センチの^{みぎこかんせつもうかんじゅうそう}右股関節盲貫銃創、けれども野戦病院のように切迫した状況の中では点滴、痛み止めなどの薬は全く無い。ただ横になって順番を待っているだけ。

ガーゼの交換も、深さ13センチあると、かなりの量のガーゼが必要ですが、傷に埋め込むガーゼも、これは憶測ですが、一度使用した物を洗濯し熱風で殺菌したのか?周りが焦げていたガーゼを使用するほど医薬品が無かった。この時の重症者は私を含めて3人が最後まで残った。私は体内に入っている爆弾の破片を取る為に2度手術したが深く取れなかった。

〈毎日 40℃以上の熱〉

この時の医師は私の知る限りでは兼巻病院の院長先生と歯科医師2名と看護婦さんで不眠不休で治療してくれました。私の容態は思ったよりも重傷で、砲弾の破片の摘出は困難で、悪寒、痙攣、真夏なのに寒い、震える。冬の厚い布団を掛けて上から押さえ付けて貰ってもまだ寒い、そして高熱。今思うとよく脳に障害が残らなかったか不思議。後日姉から聞いた話ですが、弟の苦しむ姿を見て、そんなに苦しいのなら死んだほうが、いいか？と私に聞いたそうです。僕は死にたくない。

生きたい。と答えたそうです。それならばと本気になって看護しようと、市川の製氷会社まで二貫目の氷を買いに行行って看病してくれました。

この姉は私の家の前がタイピスト学院でしたので、二十歳くらいの時にタイピストとして女性3人が上海に配属され、其の時上官より、万一の時は死して生き恥を曝さずと、劇薬（青酸カリ？）を渡されたそうです。あの時私が死にたいと言ったら、「一緒に死を覚悟した」と後日聞きました。

私以外の重傷の女性Sさんは、祐光町の憲兵隊の近くに住み、火災で避難しようとした時に、消火に当れと命令され、避難するのを阻止されて逃げ場を失い、止むを得ず井戸の中に入り火から逃がれたが、釣瓶の屋根が焼け落ち、背中に落下、肩から腰の辺りまで背中一面に火傷を負った。お姉さんが毎日付き添って、少しでも痛みをやわらげようとマンダリンの演奏を聞かせたりしていました。横にも、勿論仰向けにも寝られない。前に布団を高くして前屈みの姿勢で寄りかかっているしかない。今ならば人工の皮膚があるので治癒も早いと思いますが、可哀想でなりませんでした。その後の消息は分かりません。

あと一人の女性Mさんは、千葉神社の境内で燃え盛る油脂焼夷弾の上に転び、胸から首、顔面にかけて火傷、更に火の付いた衣服を消そうと手で抜いた為、両手に大火傷、両手の指を失い、重症となったが後日お腹に居た子供も無事生まれ元気で暮らしていると聞いて安心しました。

〈ガス壊疽かも？と診断〉

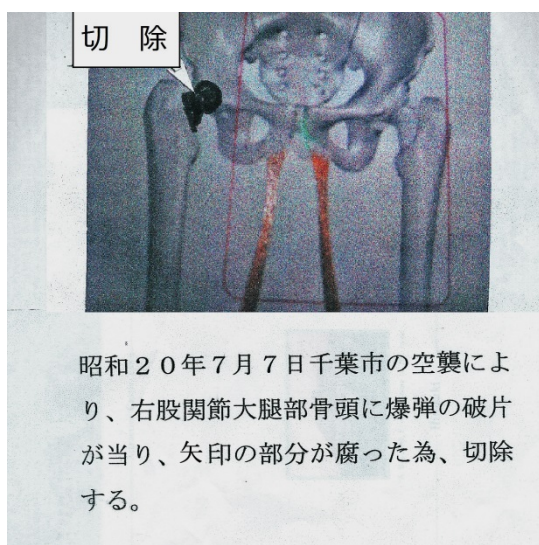
私はガス壊疽ではないかと診断され永くは持たないと云われたそうです。

毎日湯のみ、一杯ぐらいの膿が出て体温計は目盛りが足りないほどの高熱と悪寒、仰向けに寝たままで全く動けない。更に尾骶骨の所に褥瘡^{じよくそう}が出て苦しみました。

〈不思議な現象が起こった〉

或る日ガーゼの取替えをした時に不思議なことが起こった。何かピンセットに当るものが有り、取り出して診るとこれが爆弾の破片でした。これまで2回手術を試みて摘出出来なかった破片が、表面に出てきた。周りの肉が腐り破片を支える筋力が無くなり重力と人間の身体は、異物を排出する様に出ているためか表面に出てきました。

爆弾の破片が取れたせいか、熱も次第に下がり、大腿骨の骨頭の部分（骨盤の間接部分）を除去する手術がようやく出来るようになった。数人の人に押さえ付けられ股関節の一部をむしり取られた。「やめてくれ、誰か助けてくれ」などと泣き叫び悲鳴を上げ、泣き喚き^{わめ}、哀願した事を今も鮮明に覚えています。



今年（2015年）の始め頃の深夜放送で、満州で終戦を迎え、捕虜としてシベリヤに送られる貨車の中で、怪我のため、足の一部が腐ってきた兵隊さんが、5、6人で押さえ付けられ、軍医が普通の鋏で、其の肉を麻酔も打たずに切り取った。あまりの痛さで失神したが、そのお陰で後に帰還出来たと話していました。私と丁度同じ状態だったなと思いました。失神した方が楽だったのではないかも

〈驚異的な回復〉

破片が除去され腐った関節を取り除いてからは驚異的な回復、けれども右の脇の下から足首までギブスをはめて固定、最初の医師は、「貴方は股関節が曲がらないので一生寝ている生活しか出来ない、」と言われました。しかし私は、正常な膝の関節までもが全く曲げることが出来ない状態の中、膝関節だけは曲る筈だと、骨が折れるのではないかと思う程のきついろハビリの結果、膝もだんだん曲がる様になり、9月半ばには退院する事が出来ました。

退院後、兼巻外科の院長先生と共に治療してくれた、近所の歯科医今井先生が、鳥飼さんそんな歩き方ではだめだ、ビクビクしないで、痛くても悪い方の足を地面にしっかり付けて歩けとアドバイスしてくれました。其のアドバイスで硬直した間接を恐る恐る必死に曲げようと痛さを堪えて鍛錬した結果、曲がらなかった股関節も自転車の片足乗りから始めて90度近くまで曲がるようになり、半年後の翌年(1946年)4月復学する事が出来ました。復学したものの検見川の学校が焼失のため、満員電車の中を津田沼に移転した学校までの通学は大変でした。

〈旧友と先輩の協力〉

杖こそ使わなくても歩行、通学できるようになりましたが、足の訓練の為に卓球部に入れて貰いました。私のような身障者でも快く受け入れていただき、気遣いながら訓練に付き合ってくれました。ショートでチョコチョコ打つのではなく、バット(この時代はラケットではなくバットと言いました)バットに当たっても当らなくても足を前後左右に使いロングで打つ訓練を長時間に亘って付き合ってくれました。対外試合があっても私の為に貴重な時間を費やしていただき感謝しています。退院してからは、一度も病院に行く事は無く、卓球をする事が唯一のリハビリでした。

〈2度目の試練〉

無事卒業し何か仕事をとって居ましたところ、映画の映写技師見習いの仕事があり、これなら足を使う事無く仕事が出来ると思いましたので、そこで雇ってもらいましたが、暫くして、このフィルムを東京の京橋にある配給所まで返却して来いと言われ困惑しました。35ミリフィルム、直径30センチのフィルムを10巻から13巻くらい、相当重量がありますので、まさかこんな仕事を仰せ付かるとは思いませんでした。躊躇しましたが、こんな大切な物を、出来ない人にさせる訳が無い。出来ると認められたから遣らせるのだと、前向きに考えて担いで運びました。

真夏の暑い日でも必死になって担いで運びました。けれどもお蔭さまで足の痛みは全くありませんでした。

〈念願の自動車運転免許取得〉

このお陰でしょうか、怪我をして5年3か月で自動車の免許を取得することが出来ました。今の自動車のブレーキは油圧式なので足の力はあまり必要ありませんが、当時のブレーキは、足に相当な力が必要で、しかも負傷した

右足でアクセルとブレーキに使い分けますので、どうかと思いましたが、一発で合格出来ました。これまで多くの方々の協力のお陰でいろいろな試練も乗り越えることが出来、座ることは出来ない寝たきりの生活と言われたのが嘘のように、正座もでき、行動範囲も大きく広がって有り難いと、お世話になった方々にいつもに感謝しています。

最も多く運転したときは年間6万^{キロ}、5年で30万^{キロ}の無事故表彰もいただきました。通算63年間、何事も無く運転することが出来、平成25年5月無傷で免許証を返納する事が出来ました。皆様のご支援、ご厚意を感謝しています。

〈餓死者が出るほどの極端な食料不足〉

平成27年6月10日「千葉市平和のための戦争展ピースフェア 2015in 千葉」に参加させていただきましたが、当時は子どもたちを護るために郊外に集団疎開させる制度が実施されました。縁故以外の集団疎開をした児童の中で餓死した子供達が居たとの話を聞いて胸が痛くなるほどショックを受けました。当時の食料事情は想像を絶するものがありました。戦後は極端な食料不足で当時、東京地検の判事さんが、法に携わるものが、法を犯して手に入れた食物を目にすることは出来ない、配給された食べ物だけで生活をしていて餓死をされたと当時の新聞で大きく報道されました。『おしん』の映画の中で、「大根めし」が有名になりましたが、まだこれ位なら良い方で、私の家では、姉が大根を米粒待に切って、調味料がないので海水で味付けし、（当時の新明町の海は非常に綺麗でこの砂でナスやキュウリを漬けたりしました）これが昼食の弁当でした。復員して来たSさんは、勤め先では、役付きで立場の有る人でしたが、文句も言わず、その大根の弁当を持って行ってくれました。

それどころか畑まで肥し（人糞）を積んだりヤカーを押して、朝暗いうちに代用食を買うために列に並んだりしてくれました。この方は後に大きな郵便局の局長を勤めたり、東京、市原千葉県内の郵便局の新規開設に尽くしたり、信頼厚く、私の尊敬する人の一人でした。

大根めしの他にサツマイモを擦りおろし、澱粉を取った粕（糞の匂いがする・砂も入っている）に少量の澱粉を加えて、ナマコ状にして薄く切り塩水で味をつけて、お雑煮のようにして食べる。こんなに臭いにおいがしてでも、

砂が入っている物でも、県庁の近くに出来た屋台（市場町）は早く行かなければ売り切れになる、行列が出来るほどの繁盛振りでした。

〈アメリカから救援物資が届く〉

そのうち米国MSU (MSUの意味はわからない)から食料の救援物資が千葉の出洲海岸に陸揚げされた。小麦、トウモロコシの粉（現在のようにコーンスープなどと云う代物ではない）、脱脂した大豆、パインジュース、砂糖（ザラメ）等、が配給されたので飢えを凌ぐことが出来た。これまでは甘いものは芋飴以外は無く人工甘味料サッカリンとズルチンで甘みを付けましたが、ザラメ（砂糖）が大きなバケツに一杯ずつ配給になり、甘い物に飢えていた人々は、カルメ（重曹）を造って食べ、世の中が明るくなった。けれども脱脂後の大豆は食べられなかった。（現在園芸店で売っている油粕だと思いますが）食べるためには長時間かけて煮る必要がありますので、燃料不足で近くの山林から松葉や松ポックリを拾い集めた燃料では、食べるまでには煮る事が出来なかった。とにかくひどい食糧難で、もし米国以外の軍隊が進駐したら、もっと多くの人々が飢えに苦しみ餓死したのではないかと思う。

あの救援物資が、無かったら、もっと届くのが遅かったら、これまで生きては居なかったと思うし、多くの餓死者が出たと思います。

お陰で多くの人々が飢えから救われ、私は米軍の爆弾によって瀕死の重傷を負い、身体障害者になりましたが、そんなことより多くの人々が飢えから救われ、その人々が寸暇を惜しんで懸命に復興に当たったので今の繁栄があり、むしろ感謝をしているのが今の心境です。

世界中を見ても敗戦国が数十年の短期間で此れほどの復興を遂げた国は歴史上ないと放送していました。

皆さん戦争は、してはなりません。絶対にしてはだめですよ。多少の不利益、多少の損害をこうむっても、絶対にしてはなりません。

くどいようですが、多少の犠牲を払っても、小さな面子なんて、我慢すればいいではありませんか。面子にだわって、争いに巻き込まれたら、もっと何倍もの損害、被害、死傷者が出ると思います。何ととっても、平和ほど尊い事はありません。

昔の人から 50 年過ぎると争いが起こり、戦争が起こると聞かされましたが、戦後 70 年かけて復興したこの日本、どうぞこの美しい日本の環境を、

ゆとりのある精神的な文化を、大事にいつまでも後世に残せるようにするのが私たちの責務だと思います。どうぞ皆さんこの素晴らしい、美しい日本を壊さないように、壊されないようにして下さい。有難うございました。

平成 27 年 8 月 16 日

編集者コメント

編集者：伊藤章夫、関康治

千葉市空襲の概略を述べます。

「1945年7月6日深夜から7日にかけての夜間焼夷弾攻撃（七夕空襲）の目標は千葉市街地で、さらに艦載機の機銃掃射が加わりました。吾妻町・本町・東本町・院内町・通町・要町・栄町・祐光町・道場北町・道場両町・亀井町・千葉寺町・長洲町・弁天町・富士見町・新町・新田町・新宿町・神明町等、千葉市中心部のほとんどが焼失し、さらに、鉄道第一聯隊（椿森）・気球聯隊・歩兵学校（作草部町）、千葉陸軍高射砲学校（小仲台）等の軍事施設が被害を受けました。罹災面積は2.05km²、死傷者1204名、罹災戸数は8489戸。」写真：7/7空襲後の千葉市街地（米軍資料）（参考資料：千葉市作成「考えよう平和の大切さ」、千葉市空襲を記録する会編「千葉市空襲の記録」